

女性に多い肝疾患

～原発性胆汁性胆管炎とは～

原発性胆汁性胆管炎は、女性に多い肝疾患の一つです。自分の肝臓の中の胆管（胆汁を運ぶ管）を自己破壊する病気の一種に発症します。

肝心かなめの 肝臓 のはなし

15

香川大学医学部消化器・神経内科教授
正木 勉

他の自己免疫性疾患（本来は体を防御する自己の免疫システムが、自分の細胞を破壊する疾患）と合併することもよくあります。例えば唾液が出口なくなるシェーグレン症候群（自己の唾液腺を破壊）、関節リウマチ（自己の骨を破壊）、橋本病（自己の甲状腺細胞を破壊）などがそうです。

初発症状としては、皮膚掻痒感（皮膚のかゆみ）が強いのが特徴です。よって、初老期の女性で皮膚掻痒感があり、かつ肝機能異常があれば、まずこの疾患を疑います。

6つの特徴で 診断を確定

診断においては、間組織内の胆管が破壊されることから、胆

道系の細胞に多く含まれるγ（ガンマ）・GTP、ALP（アルカリホスファターゼ）という酵素の数値が上昇します。病気が進みますと、肝細胞に多く含まれるAST、ALTという酵素も数値が上昇してきます。

続いて、細胞内の小器官・ミトコンドリアを抗原とみなして作られる抗ミトコンドリア抗体が血清中に見られます。また、免疫において大きな働きをする免疫グロブリンの一種、IgMの値が高いのも特徴です。

確定診断では、肝臓に針を刺して組織の一部を採取する肝生検という検査によって、「非化膿性破壊性胆肝炎」と呼ばれる胆管炎の像が見られるのが特徴的です。

原発性胆汁性胆管炎は治りに

原発性胆汁性胆管炎の臨床的特徴

- ①初老期の女性（50～60代）に多い
- ②他の自己免疫性疾患と合併
- ③皮膚掻痒感が初発症状
- ④胆道系酵素（γ-GTP、ALP）の数値が高い
- ⑤抗ミトコンドリア抗体が陽性で、IgMの数値が高い
- ⑥肝生検診断で非化膿性破壊性胆肝炎の像が見られる